

探訪 北の風景 ⑨8

ポー川史跡自然公園 根室管内標津町

青木和弘

知床半島の付け根の南側に位置する標津町は「日本で最も美しい村連合」に加盟する道内9町村のうちの一つ。2020年には「標津遺跡群伊茶仁（いぢやに）カリカリウス遺跡」が「鮭の聖地」の物語「根室海峡一千万年の道程」の一つとして日本遺産に認定されている。実は、この伊茶仁カリカリウスを含む「ポー川史跡自然公園」がすごい。

612ヘクタール（東京ディズニーランド12個分）という広い土地には3つのエリアがある。まず、公園入口に公園ビジターセンターがあり、そこには湿原や遺跡の解説や出土品などの展示があり、さらに開拓時代の学校や農家、サケ番屋などを復元した開拓の村が併設されている。国指定天然記念物の標津湿原は貴重な動植物の

複雑に曲がりくねつて流れるポー川は天然記念物なので通常は立ち入りできないが、6月～10月に、ガイドを伴ったカヌー体験ができるのでお薦めだ。

ポー川の森林地帯側に伊茶仁カリカリウス遺跡があり、ここには縄文時代から擦文時代など、約1万年前からの堅穴住居跡が2549軒もある。有名な青森県三内丸山遺跡が800軒だから、その3倍の規模で、単一の遺跡としては日本最大の集落数である。

先人たちの暮らしを支えたのがポー川をさかのぼる豊富なサケと湧き水で、地熱の影響で真冬でも5°Cほどの水温が保たれて凍らない。広大な広葉樹林の主体はミズナラで、森は開拓期に伐採されたため多くは樹齢80年以内だが、樹齢500年以上と推定される巨木も残っている。また、同遺跡に復元された堅穴住居の中にヒカリゴケが自生し、外光を反射して緑色に光る。5月から10月にかけて観察でき、絶好の見ごろは7月だという。

5月8日付の毎日新聞が「標津で出土の勾玉 新潟産ヒスイ、1000キロの旅 縄文では最東端 経済力の象徴か」と報じた。ヒスイは碧（みどり）色の宝石で、2016年に日本の「国石」（日

宝庫である。尾瀬ヶ原の3分の1の広さを持ち、木道が整備されている。5月下旬から7月上旬にかけてコケモモ、ヒメシャクナゲなどの湿原性の植物が花を咲かせる。特に道内でも限られた地域でしか自生していないエゾゴゼンタチバナの群落を見ることができる。



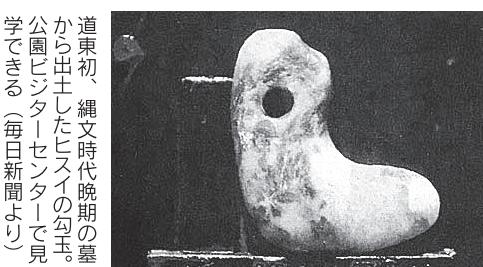
公園入口にビジターセンターがあり、資料館も兼ねていて、遺跡の出土物などを展示している。その横から、遺跡まで行ける大型遊歩道あるが、湿原を行く木道からも遺跡に行ける。自転車の無料原貸し出しがある。

テータスシンボルだったのだろう」と話している。ちなみに、この勾玉の大きさは縦3・8センチ、横3・4センチ、厚さ1・6センチ前後で、直径3・6ミリの穴があり、墓の主が生前、ひもで結んで身に着けていたと思われ、この地域の集落跡の規模からも、ここに大きな経済圏が存在していたことがわかる。勾玉は公園ビジターセンターで見ることができる。標津には、このほか標津川流域に古堂（ふるみち）遺跡や三本木遺跡もある。



ポー川史跡自然公園を流れるポー川。1万年以上続く人々の暮らしに欠かせないサケと豊富な湧き水を提供してきた。海側（写真左側）は国指定天然記念物の標津湿原。森林側（写真右側）に多くの堅穴式住居跡が見つかっているカリカリウス遺跡があり、カリカリウスシャチ遺跡などもある。北側上空からドローンで撮影した動画より（標津町提供）

標津町は漁業と酪農の町で人口は4996人（2022年3月末）、町の開基は戸長役場が設置された1879（明治12）年だが、人々の歴史は古く、遺跡をたどれば縄文時代から北方民族のオホーツク文化期や、本州の弥生文化の影響を受けた擦文時代、アイヌ文化期と1万年にもなる。江戸時代後期から漁場の開拓のため和人が訪れるようになり、はじめは松前藩の傘下に置かれていたが、場所を請負う飛騨屋による過酷な使役にアイヌ民族が反乱を起こしたクナシリメシナの乱（1789年）をきっかけに幕府は、ロシアの南下に備えアイヌ民族の慰撫とサケマスの漁業資源を握るため、東蝦夷地を直轄地（1799年）とし、後に北辺警備のため会津藩領として陣屋を置かせている。北方領土の国後島を間近に望む尾岱沼（おだいとう）に至る砂州の途上に「北辺防衛会津藩士顕彰碑」がある。



道東初、縄文時代晩期の墓から出土したヒスイの勾玉。公園ビジターセンターで見学できる（毎日新聞より）



ポー川史跡自然公園の入り口。湿原へ続く木道があり、公園ビジターセンターには開拓の村が併設されている